

# 議事堂炎上

長谷川時雨

青空文庫



明治廿二年二月の憲法発布の日はその夜明けまで雪が降った。上野の式場に行幸ある道筋は、掃清められてあつたが、市中の泥濘は、田の中のようだった。

上野広小路黒門町のうなぎや大和田は、祖母に金のことで助けられていたので、その日も私たち子供に、最大公式の鹵簿を拝観させようと心配してくれた。

うなぎやの親方は、私の父に揚板の下の鰻を見せて、あらいのを箆にあげて裂いた。

父は表二階で盃を重ねはじめた。今朝から、というより昨日から、芽出度芽出度といつて、何かにつけてはお酒を飲んでいたので、あんぼんたんはそれをまた心配していた。

なぜなら、その目出たい日の午前、文部大臣森有礼が殺されたと、玄関から駈け込んできて知らせたものがあつたとき、わけも知らず胸がドキンとした。またすぐあとで、西野文太郎がギザギザに切殺された——死骸を入れた棺桶が通る——血がポタポタ垂れている——と、ほんとか嘘か、ワツという騒ぎが来て、越中島の練兵場で、ズドンズドン並んで、鉄砲でやられているのと、盛んな蜚語が飛んで、人々は上を下へと、悦んだり青くなったり、そのなかを市中は、菰樽のかがみをぬいて、角々での大盤振舞なのだから（前章参照）、幼心には何がなんだかわからず、大きな鰻をさかせたり、お酒をの

んだりしている父と、戸外そとにすることがたよりなかった。

思えば父たちのよろこびは、父祖ふそみな、町人まちびとと賤いやしめられてきた長い長い殻からを破りうる、議会政治をむかえるため、ここに新憲法の成立発布を、どんなにどんなにか祝したく思ったのであろう。江戸に生れて、志望を立てたのか、流行でなったのか知らないが、剣を学んだ壮士が、幕府の倒壊をよそに見、朝ちようしん臣しんとなり、転じて自由党に参加して野人やしんとなり、代言人となった彼は、自由民権といい、四民平等ということに、どんなにか血を湧わかしたのであろう。それは一人の江戸町人の忤せがればかりではない、国をあげて平民はよろこんだのだ。

——俺おれたちの時世がくる——

それが六十二議会で、議会は爛ただれきつたものになって民心けんおに嫌厭けんおをさえ感じさせるようになろうなどとは思ひもかけず、彼は赤黒くなるほど飲んで祝したのだ。

私は十才とおにならない小耳こみみにも、よく父が、

「俺は六十になったら代言人（弁護士となっていたかもしれない）をよす。若いものも、華はなやかに隠退おんたいさせるといつている。」

と口ぐせのように言っていたのを覚えている。淡白で、頑固で、まげずぎらいで、鼻つぱりだけ強い、やや軽率と思われるほど気の早いところのある、粘着性のうすい、申分ないほど、末期的江戸氣質タインブを充分にもった、ものわかりはよいが深い考えのない、自嘲じちよう的皮肉に富んだ、気軽で、人情深くユーモアな彼は、なんとしても自分が法律なんぞという畑の人間でないことを、事ごとに思いあたっていたものであろう。だが、生れ土地で、地盤というものを、すこしでももっていたためか、選挙時にはゴタゴタしていた。

——日本橋区選出議員は改進黨の藤田茂吉氏ふじたもきちだったが、その後楠本正隆氏くすもとまさたかが、政友会から出る時、輸入候補だというので、地元への折合を担ぎこまれていた。いわゆる顔役——そんな時に、人を担いで顔をうつっている区内の政治好きが、楠本氏に草鞋わらじを穿かせ、袴はかまのももだちをとつて連れてきた。握飯にぎりめしも持っているのだという。旅から来て、新選挙地に草鞋をぬぎ、土着どちやくになるのを意味するのだときいたが、嘘の皮で、その前日にも打合せに来ている。区内にどうぞ住みもしなかつたが、ともあれ、選挙ブローカーが附いて、その姿で戸別訪問をはじめた。だが、おひとよしの町人は——日本橋区は金で動かないからという策略があたつて、握飯をもつて、草鞋で歩くとは、清廉せいれんな人と当選させた。楠本氏はえらい人だというのに、こんな芝居めいた所作しよさくをするのが、あんぼんたんに

は、代議政治を委任される代議士というものが、妙なものとして印象された。

深川の木場が、震災の幾年か前まで、土地つ子で帽子をかぶったものが歩いていなかったように、日本橋区大門通辺では、明治三十年ごろでも、帽子を被<sup>かぶ</sup>つて歩いているものはすけなかった。それは大よそゆきの旦那<sup>だんな</sup>に限られた。旦那たちも紐<sup>ひも</sup>までこつた前掛<sup>まえだれ</sup>をかけている。ましてお店<sup>みせ</sup>の人は羽織を着たのもすけない。男の子は日清戦争後、めくらじまの上<sup>うわ</sup>つぱりを着るようになって筒袖<sup>つつそで</sup>になった。やつぱり盲目<sup>めくらじま</sup>縞<sup>しま</sup>の（黒無地の木綿）前垂れをしめている。小僧さんが筒袖になったのはそれよりずっとあとだ。それもやや文化的商業、鉄物屋とか機械商とか、横浜と取引関係のある店からあらためはじめた。

だが、そんな小さな改良のかけにも、あらそわれない物の推移があった。父は家業がら、近所の商家からの依頼をうけるので、店の推移について心を動かされもしたのであろう、よくこんなことを言った。

「黒い、大きな判<sup>はん</sup>こが、朱肉になつてくると、商業<sup>あきない</sup>の具合がちがつてくるな。」

紫色のスタンプなどは、まだ見られないのだった。問屋筋のかたぎのうちでは、大きな、極<sup>ごく</sup>印<sup>いん</sup>のような判<sup>はん</sup>をベタベタと押した。実印も黒色<sup>くろ</sup>だった。それが朱肉の、奇麗な印<sup>いん</sup>判<sup>はん</sup>

になると、自然古い商業の、法則と反したものが流れてきて、古い取引が倒れたり、新しいやりかたが破産したりしたものと見える。

あたしの家の近所で、一番早くなくなつたのが、両換屋りやうがえやと、煙管キセルのらお問屋だ。

大問屋町にすむと、土地の名によつて、地方取引先の信用につなげるので、この大店おおたなの中にあつて、びつくりするような小店舗がある。こういう人はきつと他所よそから、必ず成功しようと、搔かきわ分けて潜りもぐ込んでくるのだから意気込みが違ふ。笑われようと呆あきれられようと、そんな事にはむとんちやくで、活気が資本もとしてだ。

隣り蔵と隣り蔵との間に、便宜上露路のある場処がある。片つぽの土蔵のほんの差さしかけが、露路口にあつて、繩しなを収しまう納屋にでもなつていると、その、たつた畳たたみ一畳もない場所を借りうけようと猛烈な運動をする。昔から土一升、金一升の土地でも、額ねにはならない高いことをいって、断ことつても借りてしまう。とにかく畳一畳へ造作をして、昼間は往来へはみださした台の上へ、うず高く店の商物しろものを積みあげる。この割込みが通れば一ぱしものだ。いつの間にか、露路上へまで乗り出し、差かけ二階が出来上り、どこへあれだけの人数が寝るのだろうと思うほどの店員が住んで働らき出す——實際古くさい大店おおみせの、よどんだ中に、キビキビとそんなのが仕出すと、小気味がよいが、近隣の空気はどこことな

く變つて、けいはくになつてくる——

そこで、あんぼんたんの家庭うちにも、少々變革があつた。それは弟が生れたからだ。

雛ひなの節句の日に、今夜、同胞きょうだいが一人ふえるから、藏座敷に飾つてあるお雛さまを収しま

えと言いつけられた。その宵、私たち小さくかたまつて、おとなしくしていると、八十二になつていた祖母が引裾ひきすそを、サヤサヤと音たてて、チンボだよチンボだよと言いなながら父の方へいった。

国会開設前であつた。父は一体遅い子持ちなのに、思いがけなく男の子が出来たので、興奮したのか、国会太郎としようかのと、変な名を言い出したりしたが、凡庸であつた時に困るであろうから、きわだつた名はつけぬものだど、祖母にいさめられていた。

生れた弟は弱い子で、真綿とフランネルと絹にくるまつていた。

男の子を生む——家督取あととりを生んだということが、旧式な家庭における主婦の位置を、どんなに高めたか——

親類というものからも、出入りでいというものからも、お手柄でございましたという讃詞さんじと、張込んだ祝いものがくる。そこで、母の勢力が増して強くなった。

議事堂が焼けた。議事堂炎上ということは、人の足を空にした。

私あたしうちの家でも、いくつ弓張りや手丸提燈てまるちようちんに灯ひを入れて出してやったかわからない。議事堂ぎじだうです、議事堂ぎじだうですと、各自みんなが口々に言った。丸の内の火事は、旧幕時代でも、町奉行、火消掛、お目附めつけその他役附老中の出馬、諸大名の固め、町火消、諸家お抱火消かかえと繰出して、持場持場についたものだが、当今、城は宮城であり、何しろ議事堂の失火だからと、父ははなしてくれた。単に建築物が焼け滅びるという言葉意外に、大きな衝動をうけたに違ちがい。

そのころは、まだ写真術が幼稚だったし、新聞の号外もまだ早く出なかったから、私たちに目から教えたものは、やはり木版摺三枚つづきの錦にしきえ絵えだった。ここに入れるのに丁度よい議事堂の火事の絵をもっていたのだが、どこへか失ってしまった。私は昨日も今日も、随分たんねんに探たずねたが見えないのですししがっかりしている。

人は何かあると、家の中になんぞいられるものではないと見える。童女どうにょのあんぽんたんの知る憲法発布もそうだったが、日清戦争のはじまった時もそうだった。ただ、ワアーと男たちが外へ飛出した。ただすたすたと駈けてゆく。下駄まえたで、前垂まえだれがけの、縞物しまものの着

つけの人ばかりの町だ。かわった風体ふうていのものが交ったって目にもはいりはいはしない。なんだか妙に、賑にぎやかにさびしく、興奮した顔というのか、近火へでも駆けつけるように、誰も話しあいもしないで、すたすたと、各自バラバラに駆けついでいった。女たちは落附かない、びつくりしたような、ポカンとした顔を門かどぐち口に並べていた。

戦争だ！

と誰かが叫んだ。みんなが駆けつけてゆくさきは交番だった。何か張紙がしてあって、巡査さんが熱そうな顔をしていた。交番の前は、遠くから黒山の人ばかりでもみあっていた。そろそろ帰ってゆくものもあって、その人たちは、青くひきしまった顔附きで家へと急いだ。今思えば、宣戦布告と召集の張紙であったのであろう。もう涙ぐんでいる娘さんや、前垂れを眼にあてている女ひともあつた。何しろ下駄の音は絶間なく走つた。

ここで一言いわせてもらえば、ここまで書いてきた日本橋で、私あたしという子供が、すこしでも小利口に見えるようならば、書きかたが大変わるく、なっていないのだ。一月ほど前に北京ペーピンから帰つたあんぽんたんの妹おまつちゃん（前出）が、成城女学部めいにいる姪めいをつれてきて、何かクスクスにこついでいたが、曰いわく、

「あなたって子は、ずいぶん呑気のんきな、阿呆あほうつたらしい子でしたがねえ、ええ、かなり大き

くなつたつて、何だかぼんやりしてたわ。」

正まぎにその通り、総領の甚六と、利発な妹とであつたのだ。

その甚六が俳句をつくる真似まねをする——私は和歌のつもりだつたのだが——当時父が俳書をひねっていたので、母は一概にそうきめてしまつて、父の方へ抗議がいった。

「あなたが、そんなくだらないものを読んで、考え込んでお出いでなさるから、子供のくせに真似をして黙りこんでいて、溜息ためいきなんかつくから、陰気くさくつて困るじゃござんせんか。」

父はおかしな人だつた。恐縮して俳句をやめ、私を叱しからないで、あんの山からこんの山へ、飛んでくるのはなんじやろか、と頭に二本、指だか扇子だかを、兎の耳のようにおつたてる小舞こまいを、能の狂言師をまねいて踊りでしたが、そんな小謡こうたいは父が汗を出して習うより早く、障子しょうじにうつる影を見て、子供たちの方がおぼえてしまつた。

あんの山よりこんの山へとか、頭かしらに二つ、フツフツとか、誰もかれもが唄うたい、踊りだすので、父が照れて止やめて、こんどは茶の湯、家中が、そろりそろりと畳をすつてあるく——だが私の溜息ためいきをついたのは、別段、父の真似をして黙想したのではなく、胸むねに病やまいをもちはじめたのを誰もが思いもつかなかつたのだ。堅い棒で肩たかを叩いたり、肋骨ろっこつをもんだ

りするのを、ただ読物のせいにはかりした。机によりかかっているからだと厳しくとめられた。

ところで、悲惨なことに——あんぼんたんにとつても悲惨なことに、源泉学校は（前出）やつと尋常代用小学校となつたのに、校長秋山先生が疫病<sup>えきびょう</sup>で急に死んで学校がなくなつた。温習科二年にたつた一人の生徒あたしは、それをしおに学問はやめ、裁縫<sup>おしごと</sup>の稽古<sup>けいこ</sup>にやられる運命になつた。

ここに、日本橋住人の一家族として紹介しなければならぬ人たちはまだ沢山ある。思えば私はおかしな人たちの中にばかり育つてきたものだった。今日の尺度<sup>ものさし</sup>では、ちよいと量<sup>はか</sup>りきれない間伸び<sup>まの</sup>のしたものだ。甚だのんきなもののようだが、首都日本橋に面影をとどめた、三百年封建制度の膝下<sup>ひざか</sup>にあつた市民の末期と、新しく萌<sup>もえ</sup>上<sup>あが</sup>る力との、間に生きたある層の、ありのままの風俗である。

あたしはまた、ふたたび日本橋を書きつづける日を持つとうと思つている。





# 青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「旧聞日本橋」岡倉書房

1935（昭和10）年刊行

入力：門田裕志

校正：松永正敏

2003年7月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 議事堂炎上

長谷川時雨

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>